

カートからウェスまで! ギター大特集
Contemporary Jazz Magazine

jazzLife

3
2017
MARCH

ウェス・モンゴメリー1965

モダン・ジャズ・ギターの巨人ウェス・モンゴメリーのイノヴェイティブなアプローチを探る

桑原あい JAZZ PIANO Analysis

スティーヴ・ガッド&ウィル・リーとのトリオ新作「Somehow, Someday, Somewhere」を分析

巻頭大特集

ジャズ・ギター 早春賦

カート・ローゼンウィンケル

ビル・フリゼール&MIZUHO

布川俊樹&矢堀孝一/北川翔也

松原正樹メモリアル

Westville Guitars

次世代ギター試奏チェック

アルバム特集

ジャズ遺産を聴く

ワーナーミュージック・ジャパン

Jazz Masters Collection 1200

LIVE & INTERVIEW

ネイザン・イースト

メガブテラス

ジャズ・レディ・プロジェクト

神保彰ワンマンオーケストラ

加藤大智

高澤 綾

SCORE

フル・ハウス
ウェス・モンゴメリー

ライク・サムワン・イン・ラヴ
ローランド・ハナ

ザ・ブルース・アンド・アイ
ティナ・ブルックス&ブルー・ミッチェル

ホーム(ミシェル・ペトルチアーニ)
桑原あい

アー・リユー・チャ
ガトー・バルビエリ(Jazz Sax Heroes)

ブラック・ナイル
スタンダード・ベース講座II

オール・ザ・シングス・ユー・アー
ジャズ・ギター・ソングブック

サムワン・トゥ・ウォッチ・オーヴァー・ミー
ジャズ・トランペット入門



ニューヨーク・ジャズの新たな胎動を予感させる6日間

NYC Winter Jazzfest 2017

ニューヨーク・ジャズ・シーンの年頭を飾るウィンター・ジャズフェストは、今年で13年目を迎え、冬の風物詩として、すっかり定着した。ここでは、13のヴェニューで同時進行しながら、NYジャズの“今”を伝える様々なグループが一気に楽しめる、恒例の「WJFマラソン」を中心に、今年のフェスティバルのハイライトをお伝えしよう。



Pharaoh Sanders : Pharaoh Sanders(ts), William Henderson(p), Dezron Douglas (b), Johnathan Blake(ds) with Ravi Coltrane(ss)

今年のオープニング・ナイトには 巨人ファラオ・サンダースが登場!

2005年に、一晩に19グループが出演する音楽フェスティバルとして始まった「NYC ウィンター・ジャズフェスト」は、今年で13年目を迎えて、さらなるヴァージョンアップを果たした。1月5日と6日に開催されたジャズ業界の総合コンファレンス「ジャズ・コネクト」、6日~10日に開催されたAPAP(パフォーミング・アーティスト協会: Association of Performing Arts Preseter)の年次総会と合わせて、2017年のジャズ界を展望できるイベントだ。

本年度もオープニングのファラオ・サンダース(ts)から、クロージングのチャーリー・ヘイデン・リベレーション・ミュージック・

オーケストラまで、6日間にわたって、15の会場に150を越すグループと600人以上のミュージシャンが参加する、ニューヨークでも最大級のジャズ・フェスティバルとなった(8日にはセロニアス・モンク生誕100年周年を記念するコンサートが開催された)。

ジャズフェストの見どころのひとつが、現在進行形の様々なジャズ・アーティストをまとめて体験できる、毎年恒例の「WJFマラソン」だ。規模拡大のため、徒歩ですべてのヴェニューを回ることは難しくなりましたが、5つの会場が集中するニュースクール大学キャンパスや4つのクラブが近接するブリーカー・ストリート周辺に絞って巡るとか、ECMレコードやリヴァイヴ・ミュージックをフィーチャーしたステージに集中し、そのすべてを満喫するなどという楽しみ方もでき

る。料金はジャズフェスト6日間の通しチケットが160ドル、ジャズ・マラソンは1日券が45ドル、2日間が80ドルと数年前より値上がりしたが、現代ニューヨーク・ジャズ・シーンを一気に俯瞰できるイベントとしてはリーズナブルといえるだろう。

1月15日のオープニング・ナイトには、前座にロンドン生まれのテナー・サクソ奏者シャバカ・ハッチング率いるUKブラック・ジャズの急先鋒「シャバカ&ジ・アンセスターズ」を従え、ファラオ・サンダース(ts)が登場。長年の女房役のウィリアム・ヘンダーソン(p)、今が旬のリズム・セクション、ダズロン・ダグラス(b)&ジョナサン・ブレイク(ds)をバックに、ファラオのテナーが烈しく咆哮した。ラヴィ・コルトレーン(ss)もゲスト参加し、ステージに華を添える。

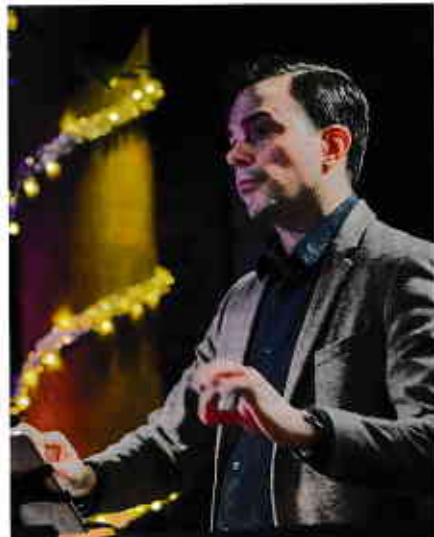
Charlie Haden's Liberation Music Orchestra with special guest Geri Allen(p)



Ruth Cameron-Haden



Darcy James Argue's Secret Society



Darcy James Argue(com,arr,cond)



Kendrick Scott Oracle



Kneebody : Adam Benjamin(kb), Shane Endsley(tp), Ben Wendel(ts), Kaveh Rastegar(b), Nate Wood(ds)



Steven Bernstein's Universal Melody Brass Band : Steven Bernstein(tp,slide-tp), Frank London(tp), Oscar Noriega(sax), Matt Darriau(sax), Arthur Baron(tb), Curtis Fowlkes(tb), Marcus Rojas(tuba), Billy Martin(ds)



Zig Zag Trio : Will Calhoun(ds,perc), Vernon Reid(g), Melvin Gibbs(el-b)

2017年も様々なタイプのバンドが 一気に楽しめた「WJFマラソン」

翌16日からトリアスロンのような「WJFマラソン」がいよいよ始まった。まずは、昨年リリースした『Real Enemies』で2度目のグラミー賞ノミネートを果たし、“ポスト・マリア・シュナイダーの一番手”との呼び声も高い、カナダ出身のアーシー・ジェームス・アーギュー(com,arr,cond)率いるシークレット・ソサエティ(Darcy James Argue's Secret Society)をフル・セット堪能する。アメリカ民主主義の暗部を描いたコンセプトアルバム『Real Enemies』はラージ・ジャズ・

アンサンブルが新たな時代に入ったことを感じさせてくれた。

ニューヨークで今最も熱いライブ・イベント、リヴァイヴ・ミュージックがフィーチャーされたパワリー・ボールルームをチェックした後は、アヴェニューCのヒップなクラブ『NuBlu』で、ケンドリック・スコット(ds)オラクルのしなやかなビートに酔う。そして『Subculture』ではベン・ウェンデル(ts)率いるファンク・ユニット、ニーボディのソリッド感に圧倒された。最後はウェスト・ヴィレッジの『SOB's』に移動し、ステイヴン・バーンスタイン(tp)の新たなユニバーサル・メロディ・プラス・バンドの破天荒なエンター

テインメントを楽しみ、元リヴィング・カラールのヴァーノン・リード(g)とウィル・カホン(ds)をフィーチャーし、メルヴィン・ギブス(el-b)が加わったジグザグ・トリオで、マラソン初日を締めた。

2日目は、シタール、アコーディオン、チェロ、ヴァイオリンを擁する異色のビッグバンド、マイケル・レオンハート・オーケストラで幕開けた。彼が指揮/編曲/プロデュースを務めたネルス・クライン(g)のブルーノート第1作のバラッド集『ラヴァース』で聴かせた耽美な音世界とは対極にある、テンションの高いパフォーマンスだった。その後、ニュー・スクール大学のECMステージへ移動。



Michael Leonhart (cond, tp) Orchestra



Marcus Gilmore's Actions Speak : Marcus Gilmore(ds), MelodiousFly(vo), Rafiq Bhatia(g), David Bryant(rhodes), BigYuki(syn)



CATotheBAND : Louis Cato(vo,g), Charles Haynes(ds), Randy Runyon(g), Bob Lanzetti(g), Jonathan Maron(b), Brett Williams(kb)



Chano Dominguez : Chano Dominguez(p), Alexis Cuadrado(b), José Moreno(perc), Ismael Fernandez(palma,vo), Sonia Olla(palma)



Jakob Bro(g), Thomas Morgan(b) & Joey Baron(ds)



ポール・モチアン(ds)・エレクトリック・ビバップ・バンドでも活躍したヤコブ・ブロ(g)がトーマス・モーガン(b)、ジョーイ・バロン(ds)と組んだトリオは、ECMならではの繊細なサウンド・スケープを描く。

この日は「NuBlu」に会場を移したリヴィエ・ミュージックで、まずはルイス・ケイトー(vo,g)のフォーキーなサウンドを堪能。続いて、マーカス・ギルモア(ds)が昨年のロバート・グラスパー(p,kb)のセッションで意気投合したビッグユキ(syn)と結成したニュー・バンド、アクションズ・スピークファンキー・ビートに揺られ、デーヴァ・マハールのソウルフルなヴォーカルに包まれた。

ディープなニューヨーク・クラブ・ジャズ・サウンドから、タクシーで「Subculture」に移動すると、そこではワールド・ミュージックが繰り広げられていた。スペインのフラメンコ・ジャズの巨匠チャノ・ドミンゲスがダンサー&シンガーを擁するグループで、雪降りすさぶ真冬のマンハッタンに南国の風を吹かせた。ダンサーのタップ、パルマ(手拍子)、カホーン、パーカッションが交錯するポリリズムの中を、ドミンゲスのピアノが駆け抜ける。

最終日の10日はメイン会場の「ル・ボアソン・ルージュ」で開催された。「音楽と社会環境をめぐる正義とは？」というパネル・ディ

スカッションに続いて、1960年代に反戦、反人種差別の声を高らかにあげたチャーリー・ヘイデンのリベレーション・ミュージック・オーケストラが登場した。

この日は、リーダーのカーラ・ブレイ(p)に代わって、生前のヘイデンのお気に入りだったジェリ・アレンがピアノ席に座った。カーラのアレンジを、ジェリのカラーに染めていく。晩年のコア・メンバーだったマイク・ロドリゲス(tp)が指揮を執り、チャーリー・ヘイデンの魂が舞い降りたようなスピリチュアルなプレイを繰り広げた。

2017年のニューヨーク・ジャズ・シーンの新たな胎動を予感させる6日間だった。 ■

●常盤広彦プロフィール 写真家、音楽ライター、横浜市出身。88年渡米、NYのジャズ制作現場の最前線で、日米各レコード・レーベルのCDジャケット、レコーディング、ライヴ、プロモーション写真の撮影を手がける一方で、日本の音楽誌や一般誌での写真撮影・寄稿も行なっている。公式サイトは「http://tokiwaphoto.com」。著書に「ジャズでめぐるニューヨーク!」(角川oneテーマ21新書、2006年)、新著に「ニューヨークアウトドアコンサートの楽しみ」(産業編集センター、2010年)がある。